



## 牛鍋 (1)

鍋はぐつぐつ煮える。

牛肉の紅は男のすばしこい箸で  
くれない  
反される。白くなった方が上にな  
る。

斜に薄く切られた、ざくと云う  
ねぎ  
名の葱は、白い処が段々に黄いろ  
くなって、褐色の汁の中へ沈む。

箸のすばしこい男は、三十前後  
であろう。晴着らしい印半纏しるしばんてんを着  
ている。傍に折靴そば おりかばんが置いてある。



## 牛鍋 (2)

酒を飲んででは肉を反す。肉を反しては酒を飲む。

酒を注いで遣<sup>や</sup>やる女がある。

男と同年位であろう。黒<sup>くろ</sup>縺<sup>じゆす</sup>子の<sup>はんえり</sup>半衿の掛かった、<sup>しま</sup>縞の綿入に、<sup>よそゆき</sup>余所行の前掛をしている。

女の目は断えず男の顔に注がれている。永遠に渴しているような目である。

目の渴<sup>かわき</sup>は口の渴を忘れさせる。



## 牛鍋 (3)

箸のすばしこい男は、二三度反した肉の一切れを口に入れた。

丈夫な白い歯で旨そうに<sup>か</sup>啗んだ。

永遠に渴している目は動く<sup>あご</sup>腭に注がれている。

しかしこの腭に注がれているのは、この二つの目ばかりではない。目が今二つある。

今二つの目の主は七つか八つ位の娘である。無理に上げたような

※「腭」は本文の字体で変換されなかったため、字体が異なります。





## 牛鍋（4）

<sup>たばこぼん</sup>なお煙草盆に、<sup>はなかんざし</sup>小さい花簪を挿している。

<sup>てぬぐい</sup>白い手拭を畳んで膝の上に置いて、割箸を割って、手に持って待っているのである。

男が肉を三切四切食った頃に、娘が箸を持った手を伸べて、一切れの肉を挟もうとした。男に遠慮がないのではない。そんならと云って男を憚るとも見えない。



## 牛鍋 (5)

---

「待ちねえ。そりゃあまだ煮えて  
いねえ。」

娘はおとなしく箸を持った手を  
引っ込めて、待っている。

永遠に渴している目には、娘の  
箸の空しく進んで空しく退いたの  
を見る程の余裕がない。

つづく

